

平成24年度 国語科研究委員会報告

1 委員会研究テーマ

言語力を高めるために、互いの考えを聞き合い、自らの読みを深めていける指導のあり方—文学的教材の読みのズレをもとに話し合い、さらに深い読みとりができるようにするにはどうあったらよいか—

2 研究内容

(1) 公開研究授業

期 日 平成24年11月7日(水)

指 導 者 信州大学教授 藤森裕治先生

単 元 名 「表現を見つめる」

(教材名「少年の日の思い出」 ヘルマン＝ヘッセ作 高橋健二訳)

授業学級 小布施町立小布施中学校 1年2組

授 業 者 小林 順 教諭

(2) 研究概要

新学習指導要領改善の基本方針である「言語活動の充実」に焦点をあてて国語委員会では、文学的教材を読む力を高めていくことを通して、言語力を育成する授業のあり方を継続して研究してきた。

また、読解の場面においての手立てとして、一昨年度より信州大学の藤森裕治先生にご指導いただき、バタフライマップを活用させていただいている。

これまでの二年間の研究から、小・中学校におけるバタフライマップ活用の有効性については確認されたが、以下のように課題となる点も残された。

- ①まず、バタフライマップを活用する上で、学習問題をいかに設定するかが最重要課題となるが、設定にあたっては、根拠となる描写に基づいて読み深めていくことができるものであり、最終的にはその作品の主題に迫るものであることが条件となる。
- ②自分の考えを発表し合う場面で、「読みのズレ」が見えたときに、そこを取り上げて議論させることで、読みがさらに深まると考えるが、そのときどのような問い返しをすればよいか、生徒の反応を予測して発問を設定する必要があること。

今年度は、以上の点を実証の観点に据えて、小布施中学校の小林順先生に中学一年生を対象に、「少年の日の思い出」を教材として授業を実践していただいた。

3 研究の成果

(1) 指導の実際

①学習問題の決めだし

上記の課題にあげた学習問題設定における条件を念頭に、まずは委員会において十分に時間をかけて教材研究を行った。

その中で、多くの生徒が最後の「自分が収集した蝶を指で粉々につぶしてしまう」場面に注目するであろうという考えが出された。その場面の「僕」の気持ちを考えさせることから、「蝶集めに熱中していた僕」と「蝶がもとで起きたいくつかの嫌な出来事」の両面が読み取れることができる。そしてそこから読み取れる「少年時代の気持ちの複雑さ」が作品の主題であろうと捉えた。そこで、主題に迫るためには、「蝶集めに熱中していた僕」と「蝶がもとで起きたいくつかの嫌な出来事」の両方を取り上げることが必要であると考え、学習問題として「客は『少年の日の思い出』を忘れたと思っているか」を設定することとした。また、同じ教材・同じ学習問題で、授業校以外の中学校でもバタフライマップを活用して、授業を実践してみることにした。

②単元展開

教材である「少年の日の思い出」は、中学1年生にとっては、かなりの長編作品である。「客は『少年の日の思い出』を忘れたいと思っているか」という学習問題に対して、生徒が、自分の立場を決める根拠となる描写を全編から探すには困難が生じるであろうという予想から、どのようにしたらよいのかを考えた。

手立てとして、まず、一文ごとに通し番号をつけたプリントを作成し配布した。それを使って、場面ごとに読み進めていき、その場面の中から学習問題に対する根拠となるであろうと思われる描写を探させ、プリントに線を引かせるようにした。

全文を読み終えたところで、線を引かせたプリントをもとに、バタフライマップを活用して、学習問題に対する自分の考えを整理させた。

③公開授業

授業では、「客は『少年の日の思い出』を忘れたいと思っているか」という学習問題に対して、「思っている」「思っていない」のどちらの立場であるか、根拠となる描写をもとに、ほとんどの生徒が挙手をして発言をし、活発に意見が交わされた。



最後の場面についても、両方の立場からの意見が出され「読みのズレ」が生じた。そこで、さらに読み深めることをねらって「客は、今はちょうのことが好きなのか」という問い返しの発問をした。その発問についても「好きだ」「好きでない」の両方の立場から意見出された。その後、再び自分の考えをまとめる終末段階において「ちょうは好きだけど、ちょうのできごとを思い出すのは嫌、忘れたいけど忘れられないこと」という、こちらがねらっていた主題に迫る人間の心理の複雑さに着目した発言があった。そこから、今回設定した学習問題および問い返しの発問は有効であったと考える。

(2) 指導者からのご指導

- ・学習問題について、教材文の「少年の日の思い出」は何層もの語り手がいる構成なので、『ぼく』ではなく『客』としたことは有効であった。ただし学習問題は「A or B」ではなく、「A or not A」であるほうがよい。
- ・生徒たちがどういう視点で読んでいるのかということを見取っていくことが授業研究において大切になる。「忘れる」についても、「忘れたい」「忘れてはならない」「忘れなければならない」「忘れたくない」……など、マトリックスを作ると25種類にも分類できる。分析結果から学習問題の有効性を判断及び検討していくことができる。
- ・授業の形式については「一斉学習」「個別学習」など、全部の足並みを揃える必要はなく、その子にあったものを展開してもよい。
- ・「少年の日の思い出」をよく読めることが目的ではなく、よく読もうとすることによって、どういう「言葉の人格」を身につけようとするかが大事である。

4 来年度への課題

授業研究会では、「学習問題および問い返しの発問は有効であったのではないか」という意見が大半を占めた。ただ、「問い返しの発問が授業の流れから考えて、やや唐突すぎたのではないか」というご指摘もいただいた。そこから展開の方法と問い返しの発問のタイミングについては、さらに十分な検討が必要であることが課題として残された。

学習問題は「A or B」でなく、「A or not A」の形にすべきであることをご指導いただいた点についても大事にしていきたい。また、同じ描写に着目しながら、立場が違う「読みのズレ」に焦点をあて、どうしてそのような読みになるのか、生徒個々の読みの分析をして、それを学習問題設定につなげていくことも大切になる。

藤森先生にご指導いただき、文学的教材の読解においてバタフライマップを取り入れて三年が経過し、その活用方法については、かなり深めることができたのではないかと思います。さらに、他の教材についての活用の可能性も感じており、今後検討していきたいと考える。